

KITA ニュース

NO.52号
January 2020

目次

- 2頁 理事長年頭あいさつ
- 3頁 2020年度方針および研修員受入れ実績
- 4頁 運営方針(研修部・技術協力部)
- 5頁 2019年度上期実施の研修コース
- 7頁 研修訪問企業の紹介
- 8頁 海外活動状況
- 10頁 国際親善
- 11頁 KITA OBの近況便り
- 12頁 「下水道維持管理」研修について(PartⅡ)



コンポストづくりで現場実習中の研修員



閉講式でスピーチしたリヒアさん

～「コンポスト事業運営」コース～

途上国におけるごみ処理には共通の課題があります。すなわち国民にごみの分別意識が浸透していないため最終処分場に家庭ごみをそのまま捨ててしまうことです。それが臭気などの環境問題や処分場のひっ迫などの問題に繋がっています。詳細は本文(5頁)を参照下さい。

謹賀新年



新年あけましておめでとうございます。

昨年では平成から令和へ元号が変わり、10月には新天皇の即位礼正殿の儀が滞りなく行われました。今年は令和2年、「子年」にあたり再び新しい十二支のサイクルがスタートする年でもあります。

世界に目を向けると、トランプ大統領はアメリカファースト政策を継続し、減税政策、関税政策等によりアメリカの景気、雇用状況は順調に改善しています。一方、米中貿易摩擦、英国のEU離脱問題による世界経済の不透明、北朝鮮、中近東等の火種もあり、将来の世界情勢は大きな不安要素を抱えています。日本では安倍第3次内閣が積極的な外交により、日本の国際社会での更なる地位の向上を目指しています。また北九州市は2015年に国連サミットで採択された「持続可能な開発目標SDGs」のグローバル目標の達成を目指しています。KITAとしてもSDGs目標の実現に努力をしていくつもりです。このような環境下で、KITAは2011年からスタートした下記2点の中期指標に基づき体質改革を続けて参りました。

KITA中長期指針

1. KITA財産づくり
2. 「KITAらしさ」と「北九州立地の強み」追求

この指針に基づいて2019年度と2020年度の2年間の事業方針を定め、KITAの社会への貢献と持続的な発展を目的に推進をしています。その計画の概要と進捗は以下の通りです。

1. KITAブランド実現に向けた事業力強化・充実

- 1) 研修ブランド・現地ニーズ把握からアウトカムフォローまでの確実な遂行
 - (1) 研修のさらなる充実
 - a. 研修員ニーズの的確な把握と確実なソリューションの提供
 - b. 多様かつ専門性の深化への対応と更なる研修先開発・充実
 - (2) 新たな研修コース受注に向けた仕組みの構築
 - a. 研修後の研修員フォローの充実および現地ニーズの確実な把握
 - b. 新たな研修ニーズの掘り起こしと研修課題抽出の継続推進
 - c. 研修フォローアップの事業化検討

【進捗】

研修の更なる充実についてはJICAとの連携を更に強め、継続推進中です。一方、新たな研修コース受注に関しては研修フォローアップの事業化に関しJICA本



北九州国際技術協力協会 理事長 古野 英樹

部に接触をし、総合的な進め方について意見交換をいたしました。

- 2) 技術協力ブランド・市内に蓄積された技術・ノウハウを活かした海外技術協力及び市内企業の海外展開支援
 - (1) 国際協力・技術協力の推進
 - a. 環境国際技術協力の推進：北九州環境局（アジア低炭素化センターを含む）との連携
 - b. 環境省研修等各種研修の推進（環境調査研修所等との連携）
 - (2) 市内企業の海外ビジネス展開に対する積極的支援
 - a. 市内企業の海外企業とのビジネスマッチング支援（北九州市関係各局との連携）
 - b. 市内企業の海外事業展開に対するコンサルティング支援（北九州市関係各局との連携）
 - (3) 北九州メンテナンス技術研究会活動の活性化・事業拡大

【進捗】

ほぼ計画通りに進行しています。国際協力・技術協力の推進ではカンボジア／プノンペン都における廃棄物能力支援、フィリピン／ダバオ市における廃棄物管理の改善がJICA草の根技術協力として採択されました。本年度はほぼ予算通り大幅な収益増となる見込みです。

2. 事業運営効率化の一層の推進

- 1) 組織・業務分担の明確化と組織間連携の強化・管理業務効率化とコスト抑制
 - 2) システムインフラの有効活用促進と機能充実
- 【進捗】
組織間の連携を更に強化し、効率的な運営を進めています

3. 公益財団法人運営の確立 透明性・公正性及び情報公開の徹底

- 1) 保護情報の厳守と情報公開の徹底
- 2) 内閣府、北九州市の外部監査対応関連ドキュメント整備
- 3) 公益財団法人としての日常マナーの確立

【進捗】

北九州市外郭団体として、また公益財団法人として更なる透明で、公正な組織運営に努めています。

以上のように、2019年度はほぼ計画通りに成果は得られつつあるところです。一方、収支面では引き続き厳しい結果が予想されています。KITAとしては関係組織との連携を更に強め、また2本目の柱である技術協力事業の拡大を行い、収支の改善に努めていきたいと思っております。皆様のご協力をお願いします。

2020年度(令和2年度)運営方針

1. KITAブランド実現に向けた事業力強化・充実

- 1) 研修ブランド
 - 現地ニーズ把握からアウトカムフォローまでの確実な遂行
 - (1)研修のさらなる充実
 - a. 研修員ニーズの的確な把握と確実なソリューションの提供
 - b. 多様かつ専門性の深化と更なる研修先開発・充実
 - (2)新たな研修コース受注に向けた仕組みの構築
 - a. 研修後の研修員フォロー充実および現地ニーズの確実な把握
 - b. 新たな研修ニーズの掘り起こしと研修課題の抽出の継続推進
 - c. 研修フォローアップの事業化検討
- 2) 技術協力ブランド
 - 市内に蓄積された技術・ノウハウを活かした海外技術協力及び市内企業の海外展開支援
 - (1)国際協力・技術協力の推進
 - a. 環境国際技術協力の推進（北九州環境局（アジア低炭素化センターを含む）と連携）

- b. 環境省研修等各種研修の推進（環境調査研修所等との連携）
- (2)市内企業の海外ビジネス展開に対する積極的支援
 - a. 市内企業の海外企業とのビジネスマッチング支援（北九州市産業経済局と連携）
 - b. 市内企業の海外事業展開に対するコンサルティング支援（北九州市関係各局と連携）
- (3)北九州メンテナンス技術研究会活動の活性化・事業拡大

2. 事業運営効率化の一層の推進

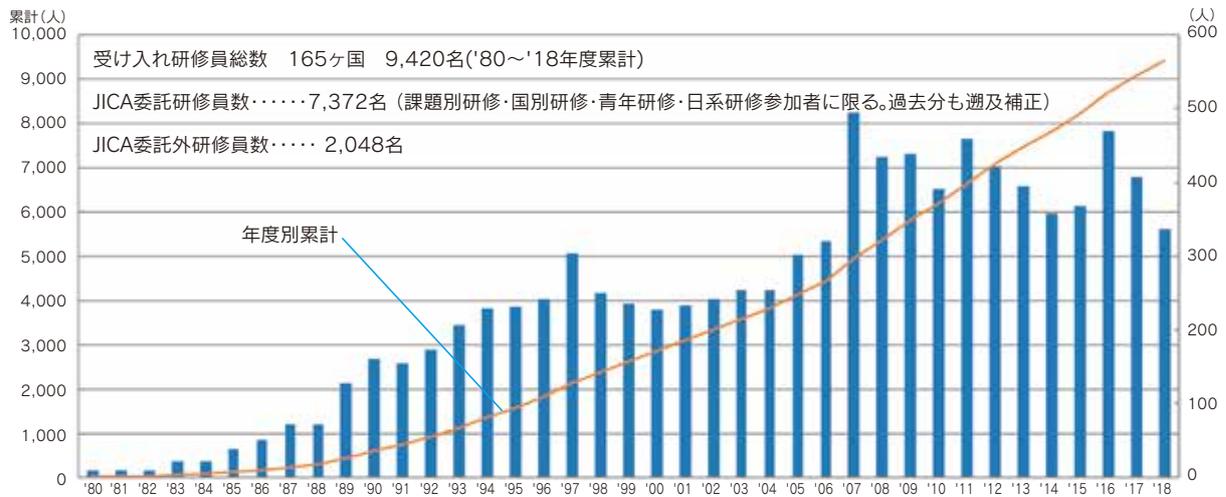
- 1) 組織・業務分担の明確化と組織間連携の強化・管理業務効率化とコスト抑制
- 2) システムインフラの有効活用促進と機能充実

3. 公益財団法人運営の確立、透明性・公正性及び

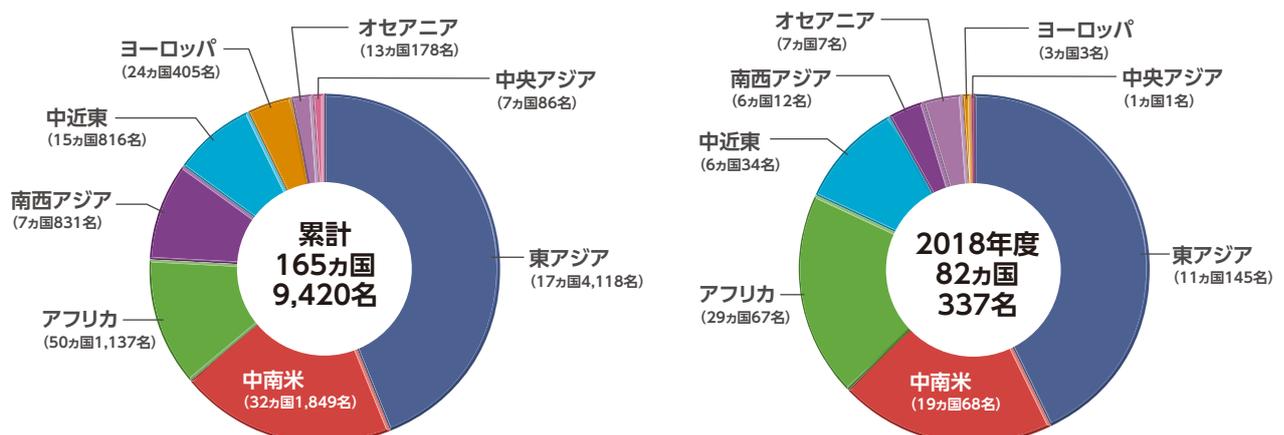
情報公開の徹底

- 1) 保護情報の厳守と情報公開の徹底
- 2) 内閣府、北九州市外部監査対応関連ドキュメント整備
- 3) 公益財団法人としての日常マナーの確立
- 4) 風通しの良い職場作りの実現

研修員受け入れ実績 (2019年3月31日現在)



地域別研修員受け入れ実績 (2019年3月31日現在)



研修部

研修部長(副理事長)

寺田 雄一

皆さま、新年明けましておめでとうございます。

昨年の研修部の業務運営は、一昨年7月に突如発生した『JICAの資金ショート問題』の余波はありましたが、皆さまのご協力によりまして何とか大きな問題はなく乗り切ることができました。皆さまのご尽力に感謝申し上げます。但し、研修部門のマスタープランにつきましても、マスタープラン策定時の前提条件が大幅に変化をしたことから、『凍結』の止む無きに至りました。しばらくの間、JICAの研修事業動向を注視した上で去就を決めたいと思っています。いずれに致しましても“**JICA研修の受託機関**”から“**情報発信機関**”への転換に向けての取り組みは、継続して実施していく事になりますので宜しくお願い致します。

さて、今年は研修の最も忙しい時期に『東京オリンピック』が開催されることとなります。従って、特に関東地区につきましても交通機関、宿舎の確保、研修先の状況等々大きな影響が出るものと予測されます。研修計画の作成時には、この点につきましても十分な配慮をお願い致します。

今年の取り組みテーマを以下に記載しますが、本年は2年目ですので内容は昨年と同様な取り組みになっています。この内、今年は**研修フォローアップの事業化**について道を開くべく、積極的に取り組んでいきたいと

考えております。

ご協力を宜しくお願い致します。

1. 現地ニーズの把握からアウトカムフォローまでの確実な遂行

(1) 研修のさらなる充実

a. 研修員ニーズの的確な把握と確実なソリューションの提供

b. 多様かつ専門性の深化に対応した更なる研修先の開発と充実

(2) 新たな研修コース受注に向けた仕組みの構築

a. 研修後の研修員フォローの充実および現地ニーズの確実な把握

b. 新たな研修ニーズの掘り起こしと研修課題の抽出

c. 研修フォローアップの事業化検討

今年の皆さまのご健勝とご活躍を心より祈念申し上げます。



技術協力部

技術協力部長

麻原 伴治

新年明けましておめでとうございます。

技術協力部はこれまで4年間、「マスタープランの推進」という課題の下、新たな分野への挑戦をしてきました。その一つが地場企業殿へのコンサルティング支援業務です。当初は当然すんなりとはいきませんでした。が、実行を通じて多くのノウハウが習得できた結果、昨年はJICA中小企業海外展開支援の案件化調査、普及実証事業で複数件の採択を受けることが出来ました。この結果、KITAの収益改善にも大きく寄与できる見込みを得ており、新たな挑戦がなんとか軌道に乗ってきたかなと感じています。これもひとえに皆さんの案件開拓への努力と、受注案件実行にあたっての相互連携の賜物です。心から感謝申し上げます。

2020年も運営方針は昨年と同じ方針で臨みます。これまで通り、北九州市関係部門等の皆さんと緊密に連携を取って進めていきますので、皆さまのご協力をお願いします。

1. 運営方針：市内に蓄積された技術・ノウハウを活かした海外技術協力および市内企業の海外展開支援

2. 具体的な取り組み：

(1) 国際協力・技術協力の推進

a. 環境国際協力の推進(北九州市環境局(アジア低炭素化センターを含む)と連携)

b. 環境省研修等各種委託研修の推進(環境調査研修所ほかとの連携)

(2) 市内企業の海外ビジネス展開に対する積極的支援

a. 市内企業の海外企業とのビジネスマッチング支援(北九州市産業経済局と連携)

b. 市内企業の海外事業展開に対するコンサルティング支援(北九州市関係各局と連携)

(3) 北九州メンテナンス技術研究会活動の活性化、事業拡大

ひとり一人が健康であることが何よりも大事です。今年の皆さまのご健勝とご活躍を心から祈念致します。



帰国後もWEBソフトを利用して研修員の業務をフォロー

2019年度 「コンポスト事業運営」コース

コースリーダー 山下 俊郎

途上国におけるごみ処理には共通の課題があります。すなわち国民にごみの分別意識が浸透していないため最終処分場に家庭ごみをそのまま捨ててしまうことです。それが臭気などの環境問題や処分場のひっ迫などの問題に繋がっています。そこで、本研修ではごみ処理方法として生ごみによるコンポスト化に着目し、その製造と活用方法、一般市民への啓発方法など日本の経験を学んでもらい、帰国後、それを彼らの母国に普及啓発することで国民にごみ処理に関する意識の変革を促すことが大きな目的となります。

研修対象の中南米諸国から10名が訪日しましたが、殆どの研修員は明るくにぎやかな性格で笑いが途切れ

ることがありませんでした。彼らの滞在中、仕事が一段落したのを見計らい血倉山登山と小倉の街歩きに誘いました。まだ夏も盛りで歩きには全く向いていない季節でしたが、彼らは暑さにも負けず非常に元気で筆者にとって大変楽しい思い出となりました。そういえば、研修員たちはwhat's upというlineのようなソフトをスマホにダウンロードしコーディネーターを加えたグループを作り連絡などで活用していたので、筆者も仲間入りさせてもらいました。会話は全てスペイン語であるため、残念ながらよくは分かりませんが、今でもリアルタイムで彼らと繋がっていますので、これを利用して、帰国研修員の今後の業務をフォローできる方法を考えているところです。



長崎への研修旅行にて(昼食風景)



鳴水小学校正門付近にて(講師、関係者との集合写真)

＝ 閉講式 研修員スピーチ ＝



- 閉講式
2019年9月18日
- 研修受入れ期間
2019/8/20～2019/9/18
- 代表スピーチ
リヒアさん(コスタリカから参加)

学ぶ事、人間として、職業人として、成長する事に対して不安な気持ちと期待を持ちながら、私たちは8月18日に来日しました。本日、沢山の素敵な思い出の他に、この期間に習得した全てを適用したいという興奮に満ちています。それは、学術的、感情的、そして個人的にも日本での滞在を気持ち良く活用できるよう細心のお気遣い頂いたお陰です。

私達との間には違いと距離があったにも関わらず、私達にこの素敵な国の扉を開けて頂いたことに感謝を申し上げます。もしかすると、二度とお会いすることはないかもしれませんが、いつも心と頭の中に、習得した全てを、そして経験した全てを抱き続けます。

研修員の一人一人には、自国で挑戦すべき事があります。しかし、それに立ち向かい克服する為のツール、情報、興奮を更に持ち合わせています。ラテンアメリカと日本の間には、多くの違いがあります。しかし、共通の利益を見据えた人類として成長することを妨げる事以上に大きな事はありません。皆様には、扉を開けていらっしゃるのをお待ちしている多くのラテンアメリカの友人がいます。

どうもありがとうございました。



研修コースの閉講式

主体的に政策立案できる行政官を育成

2019年度 「再生可能エネルギー導入計画-太陽光発電を例として-(A)」コース

コースリーダー 植山 高次

本コースは再エネ普及を担当する技術行政官を対象とした育成コースです。行政官とはいえ政策を立案実行するには技術的知見がなければ、政策立案に新しいアイデアを盛り込むことや施策の効果的な実行が難しいと思います。そこで本コースでは日本の普及政策を教えることは勿論ですが、必要な技術力も習得できる構成になっています。それも単なる技術紹介ではなく、コンサルタント、PVシステムエンジニアなどの専門技術者の提案をうのみにせず、指導力を十分発揮出来る実力をつけさせることを目的としています。

この目的をわずか6週間で達成する為、本コースではFSから建設、運転、メンテナンスに至る各段階に必要な技術を効率よく習得できるよう工夫しています。理解度を深める為、随所に演習・実習・見学を組み合わせています。コースが終わってからの感想では「上司からの指示で政策を考えていたが、今は自分自身で自負を持って仕事ができる」「今までの自分は、技師としては死んでいた。この研修で、技師としての自分を取り戻せた」などとコースでの研修が研修員に好ましい意識変革を

起こしています。

本コースは8年間11コースの歴史があります。その間環境は激変し、高価だった発電コストも今では原子力より安くなるようとしています。世界中が太陽光発電に注目し、新たな問題も起こってきています。本コースは情勢変化にダイナミックに対応し、再エネの世界的な普及に貢献したいと思っています。



九州工大での逆潮流実験。見えない電力の動きをどの様に感得させるかが課題



吉野ヶ里発電所でメガソーラーの見学。建設・操業・メンテナンスを一貫して担当しているNTTファシリティーズによる解説が貴重

企業が求める人材の育成とは？ -教育専門家の意識改革を図る-

2019年度 「実践的電気電子技術者育成」コース

コースリーダー 植山 高次

本コースは一般大学、職業訓練大学の教師を主な対象とし、企業が求めるエンジニアを育成できる教育とは何か？を追及するコースです。企業は何処に配置されても電気技術者として通用する柔軟な応用力を求めている、その職場にぴったりな専門知識を求めているわけではありません。その為に教育機関は電気電子技術者としての必須科目の本質を納得感を持って理解させることが重要で、講義の内容を工夫し、これを真に納得させる為の演習、実習、見学との組み合わせを適切に実施する必要があります。

本コースでは、私が基礎技術と考えるほとんどの科目を網羅し、これらを研修員にあるべき姿で教授し、教育の在り方を体得して貰うことを意図しています。その内容についてすべての研修員から「理論と実習の組合せが理想的」「研修員が抱えるあらゆる問題を解決してくれる」「短期間に修士課程並みの科目を適切な構成で網羅している」などの肯定的意見がありました。ある研修員からは「2か月前に某国で同様なコースに参加したが、研修の質の上で、JICAコースは格段に優れていた」ということでした。

「学生に必要なのは、どの分野でも適応出来る本質的

な知識である」「実習の目的は基礎理論について納得感を持って理解させることである」などほとんどの研修員に本コースの意図を理解した気づきがありました。

幸いコース設計のコンセプトが好感を持って受け入れられているので、大変励みになり、来年はますます良いコースにしたいと意を新たにしています。



北九州高専での交流回路実習では古い設備でも有効な教育ができることを実感



日鉄テクノロジーでの流体機器実習では実際のポンプでインバータによる省エネの原理を理解

KITA研修では大変お世話になりました

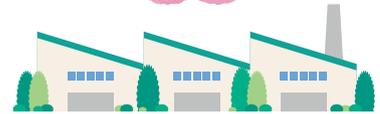
“Glocal” で世界へ羽ばたくチャンピオン商品を目指して



株式会社 辻利茶舗 様

〒802-0006
福岡県北九州市小倉北区魚町3-2-19 2F

企業訪問



コースリーダー 中島 康紀



辻社長の熱きご講義に聴き入る研修員

途上国においては、先進国市場をターゲットに「売れる商品」を開発して輸出振興を図ることが重要な課題となっています。しかしながらなかなか付加価値商品開発や輸出商品の多様化ができていない現状があります。その打破のためのJICA研修「先進国市場を対象にした輸出振興/マーケティング戦略」コースの一環として中南米地域の研修員と一緒に(株)辻利茶舗をお訪ねし、辻社長の話を伺う機会を得ました。

辻利茶舗は辻利右衛門が萬延元年(西暦1860年)に辻利を創業したことに端を発するそうですから、約160年の歴史を有する老舗です。辻利という名の茶舗は他所にもありますが、源は同じで簾分けなどにより別法人となっているそうで、小倉の辻利茶舗は1956年に法人化され現在の辻史郎社長で7代目になります。業界に先駆けて店内に日本茶をベースにした喫茶コーナーを設置するといった先進的な取り組みで知られていますが、現在はそれだけにとどまらずお茶文化や歴史背景を反映させた抹茶スイーツといったユニークかつ高品質な商品を開発し地場だけでなく、海外へも広く展開(12カ国46店舗)されている北九州で最も元気のある企業の一つです。

今回研修の目的は、そのような商品開発や海外展開の考え方、進め方をご講義いただくともに店舗で実際の商品などを確認することで自国のチャンピオン商品開発の足掛かりを得ることにあります。

最初のご講義では、辻社長のパッションにあふれたお話を研修員全員食い入るように聞いていました。特に、辻利茶舗のコンセプトの核である『ビジョンはグローバルに』『スタンスはローカルに』を総称した『GLOCAL』(GlobalとLocalを合わせた造語)は辻利の商品、例えば自国文化や歴史に根差した「抹茶」を材料に世界に通用

する商品(抹茶スイーツなど)を開発するといった、まさにチャンピオン商品開発のキーコンセプトといえるもので、研修員も深く感じるどころがあったようです。

店舗見学では、京町本店を訪問し2階にあるスイーツ加工場でプリン製造の見学をさせていただきました。辻利のスイーツは基本店舗販売のみで加工はすべて社内とのことです。それだけ品質に対して厳しい態度で臨まれていることが分かります。高品質はもちろんですが品質の均質化にも非常に注意を払っていらっしゃるようでした。例えば、プリンでは夏場・冬場で外気温が違うので蒸し時間はオープン温度×時間ではなくプリン内部温度を測定してそれで設定されているそうです。

売れる商品のベースには、良いモノづくりがあるということの良いお手本だと言えます。

また、辻社長自らレクチャーいただいて、カジュアルなミニ茶会を催していただき研修員一同大喜びでした。

最後に、辻社長の「あなた方の国々にも、きっと茶に匹敵する文化や歴史のある材料があるはずだ。それを世界に通用する商品にすることを期待している」との熱いメッセージをいただきお店を後にしましたが、実に充実した研修となりました。

このような素晴らしい研修先はなかなかありません。引き続きお願いできればと考えています。



ミニ茶会を楽しむ研修員



京町本店前での記念写真

高性能排水処理システム(株)ジェー・フィルズ殿)のベトナム事業展開を支援

JICA中小企業海外展開支援事業の活用をサポート

技術協力部長 麻原 伴治 部長専門員 石川 精一・宮田 利勝

KITAでは、地元企業を中心に海外展開にあたってのコンサルタント支援業務にも取り組んでいます。その取組みの一つが(株)ジェー・フィルズ殿の独自開発「高濃度有機系排水の高性能処理システム(CMシステム)」のベトナム展開事業で、国際協力機構(JICA)の中小企業海外展開支援事業のスキームを活用したものです。

KITAは2015～2016年に同社のベトナム・ハイフォン市での「案件化調査」をサポート、その後も引き続き実設備での実証、そして広く普及を行う「普及・実証事業」についても北九州市などと共に支援を進めています。

同社の「普及・実証事業」は、2018年にJICAの採択を受け、ハイフォン市関係機関との折衝や現地業者の入札・選定などを経て、現在同市ゴックハイ魚市場内で実用の排水処理設備として工事に入ったところです。11～12月には整地と基礎工事、年が明けて2月には据付工事・試運転、3月に稼働開始の予定です。4月以降はセミナーや見学会等を開催する計画で、KITAは本システムの一層の普及に向けて支援して参ります。

ハイフォン市からは、同市の「グリーン成長推進計画」の柱の一つである排水対策としてこのCMシステムが期待されており、また(株)ジェー・フィルズ殿には、すでにベトナム国内の排水排出企業や環境事業企業から問い合わせが寄せられていて、ビジネス展開への期待

も大きく膨らんでいます。



高性能排水処理システム(CMシステム)設置予定場所に掲示された看板(ハイフォン市農業農村開発局より設置)



ゴックハイ魚市場で進む整地作業



現地工場で作成中の排水処理機材

「地域における環境管理」をテーマに北九州市で研修が行われました

環境省「日中韓三カ国合同環境研修」

技術協力部 部長専門員 澤田 献

日中韓環境大臣会合で合意された「環境共同体意識の向上」を実現するため、平成13年度から各国持ち回りで三カ国の環境行政を担う行政官が集まり、合同で環境研修を行っています。今回が第19回目となりますが、3年前に引き続き北九州市にて9月15日～21日の日程で実施されました。中国から研修生5名、日本から研修生8名が参加し、韓国からはフォーカスポイント1名とオブザーバ1名が参加しました。

今回のテーマは、「地域における環境管理」であり北九州市の公害対策の歩み(特に大気、水)、ごみの分別回収、リサイクルなどへの取組み、自然との共生などを中心に座学と現場見学を組み合わせたカリキュラムで研修しました。北九州市や福岡県の行政にも講師の派遣などで、多大なるご協力をいただきました。

北九州市環境ミュージアム、エコタウンセンター、日明の焼却工場、かんびん資源化センター、浄化センターなどの施設を見学するとともに平尾台・千仏鍾乳洞ツアー、響灘ビオトープ視察なども織り込んで、北九州市の多様かつ充実した取り組みを実感いただくことが出来ました。

また、研修生同志のグループ討議では、「地域の環境管理」について何をすべきか英語で活発な意見を出し合いました。今回、研修会場(宿舎)が紫川沿いで、北九州市役

所、勝山公園が望めたことや晴天に恵まれたこともあり、研修生には好印象を与えたようです。閉講式の後で小倉城、庭園、呈茶など日本文化の一端を体験いただきました。来年は、韓国・大田広域市で開催予定となっています。



響灘ビオトープにて



閉講式での集合写真

先進都市のごみ対策を学ぶ訪日研修

JICA草の根プロジェクト「プノンペン都廃棄物管理改善事業」

技術協力部 部長専門員 石川 精一

クションプランに役立てて欲しいものです。

プノンペン都で、廃棄物管理に関するJICA草の根技術協力事業が2019年1月からスタートしました。急速な都市化により、プノンペン都では、ごみの処理や管理能力のレベルアップが喫緊の課題となっています。プラスチック容器等のごみで溢れているトラベック水路周辺でも官民が立ち上がり、ごみ対策を協議し始めています。そこで、ごみ対策の先進都市である北九州市を参考にするため、2019年8月25日から31日まで、HUOTHAY副知事をはじめプノンペン都の代表者10名を迎え研修を行いました。

梅本副市长や関係局長へ表敬後、「公害克服の歴史」や「ごみの分別」、「循環型社会形成の取組み」、「不法投棄防止対策」、「マナーアップ活動」の講義を受けた後、現場でのごみの分別収集や清掃、かんびん資源化センター、焼却工場、埋立て処分場までの一貫した処理フローを確認しました。また、若松区のエコタウンセンターや楽しい(株)、西日本ペットボトルリサイクル(株)の訪問や官民が協働でごみ対策を行っている北九州市NPOの「金山川美化の取組み」や柳川市の「掘割の再生」、大木町の「生ごみのメタン発酵による発電及び液肥の製造」等の視察を行いました。その間、研修員間で討議を行い、意見をまとめていきました。研修員から「今回の研修は非常に有意義であった。」との意見が多く寄せられました。是非、今後のア



梅本副市长へ表敬訪問



散らかったごみの清掃

コンクリート廃材からの再生骨材製造システムの海外事業展開を支援

技術協力部長 麻原 伴治 部長専門員 江本 寛

昨年末、星尊(尙)殿をサポートしJICA中小企業海外展開支援の案件化調査に応募してきましたが、2019年2月に採択を受けました。その後、8月に正式契約が成立したことから、タイ国・バンコク都を中心に現地調査を開始しました。

タイ国においては、急速な都市化の影響で増加する建設廃材を含む廃棄物処理は重要課題であり、「国家環境質向上政策・計画」を掲げ廃棄物発生量の削減やリサイクルの目標を定めていますが、その解決に向けた具体策の実行が喫緊の課題となっています。また、建設廃材の過半を占めるコンクリート廃材は、主に水害対策として土地の嵩上げ用埋め戻し材として利用されており、6価クロム等の有害物質溶出が懸念されます。こうした中、同社が提案する技術はコンクリート廃材の再資源化において、①湿式による付着モルタル分を剥離し構造部材に適用可能な強度の再生粗骨材、細骨材を製造、②抑制剤による6価クロムの無害化、③湿式製造で使用する水が完全循環するので環境汚染がない、といった特徴を有します。

今回の第1回渡航時においては、①タイ国やバンコク都における建設廃材への取組実態把握を主目的とし、②バンコク都での現地解体材の採取、③C/P候補関係機

関(ラームカムヘン大、工業省、土木・都市計画局)との意見交換、④ビジネスモデル構築時のパートナー予定企業(SCG)との面談、等を実施しました。今後は、バンコク都等での事業化を目指した「普及・実証事業」の提案に向け、調査活動の充実を図っていく予定です。



バンコク都内ビル解体現場でのサンプル採取



土木・都市計画局、ラームカムヘン大とのミーティング

平尾台を観光しました

事務局 事務課長 高井 辰彦

令和元年10月19日の午後、食品安全行政コースの研修員を対象に、北九州市立大学FIVA(*1)メンバーの企画による「平尾台・千仏鍾乳洞散策ツアー」を実施しました。

平尾台は日本三大カルストの一つで、中でも千仏鍾乳洞は国の天然記念物に指定されています。そうではありながら、これまで親善活動で訪問したことはありませんでしたが、今回FIVAメンバーの発案により初めて研修員をご案内することになりました。

現地到着後、まず千仏鍾乳洞を見学しました。当日早朝まで雨で午前中も曇り模様であったためか、他の観光客も少なめで混雑することもなく、洞内をスムーズに廻ることが出来ました。見学通路のほぼ中間地点である「奥の細道」からは水流の中を歩く行程で、最初は皆「うう、冷たい」と大騒ぎでしたが、垂れ下がった鍾乳石を避けつつ、窮屈な水路を歩くことで、一層探検気分が湧いたものと思います。

1時間弱で洞外に出ましたが、皆さん緊張から解き放たれて疲れが出たようで、しばらくはせんぶつ茶屋前の待合いスペースで、景色を眺めたり、記念撮影をしながら休憩を取りました。

休憩を終えて駐車場に戻るまでが、長くて急な上り坂で、研修員の皆さんもいったん回復したエネルギーをここで使い果たしてしまっただようです。もともとは、平尾台内を歩く予定でしたが、皆さん「もう歩けない」ということで、カルスト散策は断念してバスで見晴台まで移動し、その近辺で気の合った同士でおしゃべりしたり、風景を写真に収めたりと思い思いに過ごし、現地での滞在を終えました。

講義や実習等の毎日だった研修員の皆さんにとって、久しぶりに体力を使ってリフレッシュした1日に

なったものと思います。

*1 FIVA

北九州市立大学 地域共生教育センター 国際交流プロジェクト「歩いて、遊んで、学んで。北九州で国際交流」をスローガンに、北九州を訪れる外国人の方々との交流を通して、日本文化や北九州の歴史を知ること、北九州に親しみを持ってもらえるようなイベントの企画・運営を行っています。



千仏鍾乳洞にて



見晴台にて

【助成金御礼】

◇令和元年9月、公益財団法人吉川育英会様(理事長 吉川卓志様)より、KITAが研修員向けに作成・配付している英文生活情報誌「Let's Enjoy Kitakyushu!」への助成金として10万円を頂きました。

ご厚意に心より感謝申し上げます。



「Let's Enjoy Kitakyushu!」

KITA人事異動(2019年7月1日~2019年12月31日)

新任

技術協力部 部長専門員..... 江本 寛(2019年 7月1日付)

近況だより

長年、KITAでご活躍された懐かしい皆様の近況便りのコーナーです。今回はお二人の先輩からお便りが届きましたのでご紹介します。

- ・宮本 正さん 元コースリーダー (KITA在籍：2007年～2016年)
- ・矢頭 昭治さん 元コースリーダー (KITA在籍：2005年～2016年)

終わりよければ、すべてよし

宮本 正

半世紀前、安川電機製作所の入社試験時に“アジアで生きて行くために、東西貿易に従事したい”とし、ロシア語も習った。が、望みは叶わずに終了。安川電機退職後、KITAでJICA研修員を教える機会を得て、ようやく念願が叶うことに。KITAやJICA九州の皆様には、私の強さで少々迷惑をかけることに成りましたが、現地調査や帰国後の定着確認に出かける機会も得ました。コースリーダー8年間で、国内外に多くの友人を得て、異文化との接触も多く、人生にとって大きな「転機」になりました。“教えることは、教えられること”や、研修員の“出藍の誉れ”に接することで『教師の喜び』も実感しました。

卒業後も、好奇心に任せて手を出す性分になり変わらず、我が家の山の神も諦めて「放し飼い」の境遇。アマ無線、考古学、Project Management学会、Country Music、日本史の勉強会、介護福祉NPO法人、町内会、現役時代の仲間との飲み会と、終活も残りは「遺影」のみと、遊び呆けています。現在、アルゼンチン帰国研修員が始めた、州レベルでのKAIZEN運動を支援中。現地での助言・指導は、チリ、ベトナム、メキシコに次ぐものです。知事が主催し、州の教育省も参加する「日本文化の移植」。現地の日系団体とも関係しますが、自走するまでには、少なくとも5年程度は掛かるものと予想。

さてさて、“終わりよければ、すべてよし”となりますか？この性分、最後まで治ることが無いと覚悟している、今日この頃です。



アルゼンチン現地での「KAIZEN」講演会。
中央の白ジャケット(宮本氏)右隣(産業開発省大臣)と有竹コースリーダー

余暇に、写真撮影とクラシックギター演奏を楽しんでいます

矢頭 昭治

KITAにはJICA国際研修で大変お世話になりました。平成17年～平成28年の11年間、エネルギー管理、省エネルギー技術、低炭素化環境技術、下水道経営コース等を担当しました。

妻の病気に伴い途中でKITAを離れましたが、多くの思い出が私の宝物として残りました。特に印象深いのはJICA九州センターの開設25周年を記念したJICAラウンジコンサートで末田コースリーダー(色々の面でお世話になりました)と二人でギターの二重奏を演奏したことです。

今から、おおよそ3年前前にコースリーダーを止めましたが、次の日から、なんだか心にぽっかり穴が開いたような感じとなり今後の過ごし方をどうすべきか悩みました。

しかし、この年齢になって新しいことにチャレンジすることは苦勞と努力を伴う割には実りが少ないと悟り、結局、これからの生きがいとして続ける為には今までに少しかじっていた趣味の延長である未熟な写真撮影技術とクラシックギター演奏技術の向上の二つしかないと考えて余暇を利用して続けることにしました。(添付写真参照)

しかしながら、私も寄る年波には勝てない年齢になりましたので、これから先は病弱の妻に寄り添った二人三脚の生活で余生を送りたいと思います。KITAにつきましては益々の国際貢献で飛躍・発展することを祈念して結びと致します。



写真撮影：老野湧水の滝(大分県竹田市)



ギター演奏：ギターアンサンブル演奏(山口県下関市生涯学習プラザ)



研修コース

下水道維持管理研修について Part II

コースリーダー 末田 元

前回述べたように、下水道整備が今後の課題という国から参加する研修員や、管渠の維持管理や下水処理場の運転管理に困っているという具体的な問題を抱えて参加する研修員もいます。当然のこととして、これら研修員間では下水道に対する知識に差があるため、研修内容の理解度が変わってきます。この差を無くすためには、一週間で習ったことを再度見直す必要があること、研修員同士で研修内容を復習し理解できた者が理解不足の者に教え、研修員全体の理解度の底上げを図る必要があります。このため、毎週一回、3時間の「振り返りの時間」で補習しています。

この「振り返りの時間」は、本研修の第二回目（2009年度）から取り入れています。当時のコースリーダー（CL）とコーディネーターが検討し取り入れた方法で、過去一週間で学んだ内容を研修員自身やグループで復習・討議し、発表をしてもらうというものです。研修内容を自分自身で振り返ると同時に他の研修員とも議論を行ってもらい、研修の理解度を向上させることを目的としています。

以下、「振り返りの時間」の運営方法について少し詳しく説明をします。

「振り返りの時間」の構成は、4段階に分かれています。①CLが作成した問題を研修員独自で解く時間 ②独自で解いた解答をグループで討議する時間 ③グループ代表者がグループとしての解答を発表し、他グループと討議する時間 ④CLが総括する。という流れです。

①について：

CLは、一週間で学んだ内容の中から重要と思われる点を10点ほどピックアップし問題集を作ります。問題の例としては、「あなたの国での下水道整備の目的は何ですか?」、「嫌気無酸素好気法（A2O法）の目的とその仕組みを説明してください」、「〇〇下水処理場では省エネ施設を導入していました。どのようなものがありましたか?」等々です。これらの問題を研修員各自がテキストを見ながら解答を書いていきます。



①個人学習

②について：

グループを2班に分け、グループ内で各自の解答を披露、討議、修正等をした後、グループとしての解答を作り上げます。グループ員はスナックを食べながらリラックスムードで討議を行います。



②グループ学習

③について：

グループの代表者（毎回変わってもらう）にグループでの解答を発表してもらい、他グループからの意見を求めます。



③グループ代表発表

④について：

講評の時間。CLから正解、コメントなどを述べ質疑応答をし、終了します。

この方法を実施して8回（8年）になります。実施して感じるのは、研修員が一週間前に学んだ内容を忘れ去っていることが非常に多いということです。問題を解くためにテキストのあちこちを探しまくり、なかなか回答に行きつかず時間を浪費してしまいます。このため、④の講評時間がなくなることもしばしばです。しかし、グループ討議の中でテキストのあちこちを探し回り、「ここに書いている」や「この記述の方が当たっているのではないか」などの言葉が飛び出しているのを見ると、このような討議そのものが非常に重要ではないかとも思っています。

幸い、この「振り返りの時間」は研修員から良い評判を受けています。今後も研修員が研修内容を自分のものにできるより良い方法を考えて実施していくつもりです。